

『別座鋪』の笑い——蕉門における「笑い」の変遷の中で——

本間正幸

其後先師曰、「病雁」を「小海老」など、同じごとくに論じけり」と笑ひ給ひけり⁽¹⁾。

(去来著『去来抄』宝永元年頃成立)

一、芭蕉の「笑い」

素顔の芭蕉は普段からよく笑う人物であつたらしい。門人たちが残した聞き書き類には芭蕉の笑う様子がしばしば写し取られている。

・「すげなき吾胸中を見せけるよ」と、阿叟(＝芭蕉)も笑ひ申されしが：

(支考著『芭蕉翁追善日記』元禄七年成立)

・「此謎は支考にとかれ侍る」とて、わらひてのみはてぬるかし。

(支考編『笈日記』元禄八年序)

・翁も笑はれたるよし、「等類不吟味、沙汰のかぎり」と申侍る。

(去来・許六稿『俳諧問答』元禄十一年奥書)

これ以外にも、長雪隠の後(芭蕉は痔疾を患っていた)、「人生五十年といへり。我二十五年をば後架にながらへたる也」(其角編『三上吟』元禄十三年刊)と言つては笑い、「身」も卑しく「心」も鈍いので「官女」や「傾城」よりも柴売り女が一番だと戯れては笑い(許六編『本朝文選』「柴売ノ説」宝永三年刊)、右袖を一寸ほど短く切つた着物を「誹諧袖」と呼んで愛用し「筆をとるものは、かやうが

よく候」(洞秋・未塵編『智周発句集』宝暦八年序)と笑つたりしているのである。⁽²⁾

冒頭の一節は「猿蓑」(元禄四年刊)撰の時、芭蕉から「病雁のよさむに落て旅ね哉」「あまのやは小海老にまじると哉」の両句を示され、編者二人(去来・凡兆)がどちらを入集させるか議論したものの結論がつかず、結局両句とも入集したいという旨を申し出たいきさつに続く一文。編者二人、なかでも凡兆が芭蕉の思いも寄らなかつた解釈を示し、両句を同列に生かしたところにこのような「笑い」が生じたものと解釈される。⁽³⁾

右に見たように、門人達の聞き書き類には多く蕉門の談笑的な雰囲気巧みに写し取られているように感じられてならない。もちろん、これらの「笑い」にはいくぶん演出された部分も含まれていたとは考えられるが(特に支考の編著に芭蕉の「笑い」が頻出する点には注意しなければならぬであろう)、門人たちがそれぞれ芭蕉の「笑い」を書き留めているあたり、やはりここには蕉門の雰囲気が一端なりとも映し出されていると見ていいように考えられる。しかし、それに比べると蕉門の作品から受ける印象があまりにも堅苦しく感じられるのはなぜであろうか。芭蕉個

人に限って言えば、旅に出るといっては悲壮な決意を固め、旅から戻ればまた次の旅への準備を固めるという求道者の的なイメージが強いし、蕉門の作品を概観しても、そこに詠まれる「笑い」はけつして明るい色彩のものではなかつたように感じられる。つまり、作品から受ける印象と聞き書き類から受ける印象には隔たりがあるように思われてならないのである。

いま「校本芭蕉全集」から「笑い」に関する語を含んだ用例を探し出し、分類して示せば次のようになるであろう。⁽⁴⁾

A 笑う(笑い)

(1) 笑う主体が「人間」以外(延宝四年〜天和二年、元禄元年〜六年へ例外)

a 軽い《挪揄》《嘲笑》(明るい《ひやかし笑い》)・
《噴き出し笑い》《メルヘン調の笑い》

↓芭蕉の深川退隠以前(延宝四年〜六年)
【例】後掲①〜④の句。

b 重い《挪揄》《嘲笑》(暗い《あざけり笑い》)・
《不気味な笑い》

↓芭蕉の深川退隠以後(延宝八年〜天和二年、元

禄元年～六年（例外）

【例】後掲⑤～⑪の句。⑭～⑮は例外。

(2) 笑う主体が「人間」（天和年間（例外）、貞享二年）

元禄七年

a 《自嘲》《笑いにならない笑い》《苦笑い》

↓芭蕉の『野ざらし紀行』の旅（貞享元年～二年）以後（天和年間（例外）、貞享二年～元禄二年）

二年

【例】後掲⑰～⑳の句。㉑は例外。

b 作為のない《笑い》

ア《自嘲を通り越したほろ苦い笑い》《笑いとはいえないような淡いユーモア》（芭蕉の句を中心に）

↓芭蕉の『おくのほそ道』の旅（元禄二年）以降

（元禄七年）

【例】後掲㉒の句。

イ《屈託のない笑い》《談笑的な暖かい笑い》（門人の句を中心に）

↓芭蕉の『おくのほそ道』の旅（元禄二年）以降（貞享四年（例外）、元禄二年～元禄七年）

【例】後掲㉓～㉕の句。㉖は例外。

B 笑われる（笑われぬ）

(3) 笑われる客体が「人間」以外

↓例なし

(4) 笑われる客体が「人間」（貞享元年～元禄七年）

↓《揶揄》《嘲笑》

【例】注(8)参照。

右を見ると、蕉門の作品中に明るい「笑い」（A(1) a、(2) bイ）が存在しなかったわけではないが、A(1) b・B(4)の《揶揄》《嘲笑》《不気味な笑い》、A(2) aの《自嘲》《笑いにならない笑い》《苦笑い》の占める割合が大きく、それが蕉門の印象に大きな影響を与えたものと推測される。

さらにここからわかることは、Aの項目で「笑う主体」（Bの項目では「笑われる客体」）が「人間」となるのは『野ざらし紀行』の旅以降（A(2)・B(4)）のことであり、それ以前の用例（A(1)）は、いずれも「鳥」「山」「草木」「幽霊（化物）」など、人間以外のものを主体としている点である。さらに「笑い」の質そのものを見ても、Aの項目では芭蕉の転機となる時期に依じてさまざまに変化して

いることがわかる。たとえば延宝八年の深川退隠以前と以後とでは、『明るいひやかし笑い』から『暗いあざけり笑い』へと「笑い」の質が変化しているし、『野ざらし紀行』の旅以降も『自嘲』『笑いにならない笑い』『苦笑い』へとその質が変化していることがわかる。さらに『おくのほそ道』の旅以降になると、芭蕉と門人たちの間で「笑い」の内容に若干違いが生じており、芭蕉の句は『自嘲を通り越したほろ苦い笑い』『笑いとほ言えないような淡いユーモア』を中心とするのに対し、門人たちの句は『屈託ない笑い』『談笑的な暖かい笑い』を中心に据えているように見受けられる。以下順に具体例を示しながら、まずは蕉門における「笑い」の変遷を辿ってみたいと思う。

二、「野ざらし紀行」の旅以前の「笑い」

最初に蕉門初期の用例(A(1)a)から紹介しよう。この時期の「笑い」にはメルヘン調の明るい見立ての句(「笑い」の内容としては軽い『揶揄』『嘲笑』)がいくつも見受けられる。

① 春風にふき出し笑ふ花も哉

(寛文七年作、同年刊『続山井』所収) 伊賀寺宗房

② 淡路嶋仕形ばなしの余所にみて

(信) 章

とも呼鳥の笑ひごゑなる

(桃) 青

(延宝四年作「此梅に」百韻、延宝六年刊『桃青三百韻附両吟二百韻』所収)

③ 霞と共に道外人形

信徳

青いつら笑山より春見えて

桃青

(延宝六年作「さぞな都」百韻、同右)

④ 熊つかひむかへば月の薄曇り

(桃) 青

水右をわらふ初雁の声

(信) 章

(延宝六年作「物の名も」百韻、同右)

たとえば、①は春風に花が揺れ動くさまを「ふき出し笑い」をするさまに見立てたメルヘン調の典型であるし、②も天空から「仕形ばなし」(身振りを加えた咄)をよそ目に見て「とも(友)呼鳥」が「吹き出し笑い」をしながら飛んで行くさまを詠んだもの。そして③も「道外人形」の青い頭を「山」が見て「噴き出す」さまを詠んだ見立ての句と解釈することができる。もともと「山笑う」は春の季

語であるが、ここは「山」が実際に笑うさまを掛け合わせた
た寓言調の句と解すべきであろう。さらに、④も同じく動
物使いの長崎水右衛門（「水右」）を、雁が「せせら笑い」
ながら飛んでいくさまを詠んだ見立ての句にはかなならない。

一方、右のような明るい《噴き出し笑い》に比べると、
芭蕉の深川退隠以後、蕉門の「笑い」は同じ見立て中心と
は言いながら暗い色調のもの、具体的には重い《揶揄》
《嘲笑》《不気味な笑い》（A(1) b）へと変化しているよう
に見受けられる。

⑤ 壁の麦葎千年をわらふとかや

農夫

（延宝八年序「田舎句合」第九番右）

⑥ 乾坤を忘れたる隠士、世間寺無用房ヲ笑ふ

（同右・第二十四番判詞、芭蕉筆）

⑦ だいくを蜜柑と金柑の笑て日

（杉風）

（延宝八年跋「常盤屋之句合」第十八番左）

⑧ 渾沌翠に乗て氣に遊ぶ

（桃）青

朝咲しらむ馬鹿々々の山

（揚）水

（延宝九年作「春澄にとへ」百韻、同年刊「俳諧次

韻」所収）

⑨ 酒手まつ程田中の杭の陰しばし

暁雲

首けらくと笑ひしの、め

桃青

（天和二年作「田螺とれ」世吉）

⑩ 見ぐるしき艶書をやくや柴枿

嵐蘭

笑ひさんやに帰ル魂

一品

（天和二年作「花にうき世」歌仙、天和三年刊「み

なしぐり」所収）

⑪ 鳴の羽しばる夜深き也

（芭）蕉

恥しらぬ僧を笑ふか草薄

同

（天和二年作「詩あきんど」歌仙、同右）

たとえば、⑤は壁間に生えた「麦」の短命を多年草の
「千年」を生きる「葎」が「あざ笑う」さまを詠んだも
のであるし、⑥も同様。こちらは「閑居の糠みそ浮世にく
ばる納豆はなど」（前書「題山家之糠味噌」という句に付
された判詞の一部。一句の内容は山家住まいの「糠みそ」
が檀家に配られる寺社製の「納豆」の浮世じみたさまを
「あざ笑う」という荒唐無稽なものであり、判詞に「乾坤
を忘れたる隠士」とあっても「糠みそ」のことにかなら
ないし、「世間寺無用房」とあっても、こちらは「納豆」

のことにほかならないのである。

また、⑦も同じく人間に賞味される「蜜柑」と「金柑」が、図体だけ大きいくせにそのままでは食用にならない「だいく」を「あざ笑う」さまを擬人化して詠んだものであるし、続く⑧も、のつべらぼう（ヌハツホウ）が天空を飛び回るさまを見て「馬鹿々々の山」が笑い、夜が明けていくという滑稽とも不気味ともつかぬ光景を詠んだもの。句の仕立て自体は前掲③に近いが、「渾沌」ヌハツホウ「馬鹿々々の山」など、聞き慣れない固有名詞が用いられているため、滑稽な中にも不気味な雰囲気醸し出されているように感じられる。

さらに⑨も街道脇の刑場で処刑されたさらし首が明け方「不気味な笑い声」を立てるさま（『校本芭蕉全集』第三卷・「芭蕉連句抄」第三編）を詠んだものであるし、⑩も「反魂香」ならぬ「艶書」を焚いたところ、遊女の魂が現れて笑いながら「さんや（山谷）」へ帰って行くさまを詠んだもの。ともに《不気味な笑い》を詠んだ句と見て差し支えないであろう。同じく⑪も食うために鳴を捕らえた破戒僧の所業を「草薄」が見て「嘲笑」するさまを詠んだ見立ての句と解することができる。

その中で同じ見立ての句とは言いながら、次の例だけは喜怒哀楽に翻弄される衆生の姿を「笑の木」「愁る草」に例えた哀感漂う作になっているように感じられる。

⑫ 民屋あつて腹をせばむる

笑の木愁る草の野は味く

（其）角
（才）丸

（延宝九年作「鷲の脚」五十韻、同年刊「俳諧次韻」所収）

また、次の例。

⑬ 孤村に悲風夫を恨ムかと

媒酒旗に咲を進ムル

昨雲
言水

（天和二年作「錦どる」百韻、同年刊「武蔵曲」所収）

こちらも従来の注釈では「女を取り持つ客引きが、居酒屋で嬌笑を売る女をすすめる」（『校本芭蕉全集』第三卷）さまを詠んだ句と解されており、これに従えば、笑う主体を人間とした唯一の例外として位置付けねばならないことになる。しかし、この時代の趨勢に照らし合わせれば、句

意がいまひとつ判然としない点に難はあるものの、やはり「悲風」「酒一簾」を擬人化して詠んだ見立ての句と解釈したいところである。ただし、ここに詠まれている「咲」がA(1)bと同質のものであったとは考えにくい。したがって「笑い」の詠み方に関してはやはり例外として扱わざるをえないであろう。

さらに元禄時代の芭蕉の作も、暗い《揶揄》《嘲笑》ではなく再び明るい見立ての句に戻っているように感じられる。

⑭松嶋は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし…

(元禄七年跋「おくのほそ道」、芭蕉筆)

⑮節季候を雀のわらふ出立かな

芭蕉

(元禄五年作、元禄六年刊「深川」所収。前書「忘年書懷 素堂亭／節季候」)

⑭は松島の風光を美人が笑うさまに見立て、象潟の「うらむ」ような風景に対置させることによって明暗鮮やかな情趣を成立させたもの。⑮も「節季候」の奇妙な姿(「出立ち」)を雀が軽く「揶揄」するさまを詠んだメルヘン調

の句であり、両句は本来であれば深川退隠以後に分類すべきであるが、句の趣きそのものが退隠以前の作に近いため、ここではA(1)aに分類した。

以上、多くの作例が人間以外のものを人間に見立て、他の何者か(主に人間)を「嘲笑」するさまを詠んでいるところに共通点が認められる。ただし、芭蕉の深川退隠を機に蕉門の「笑い」が質的に変化していることは明らかであり、深川退隠以前の作(A(1)a)には軽いユーモアの句も見られるものの、退隠以後の作(A(1)b)には趣向に凝ったものが多く、それが一句に重々しい印象を与えているように感じられる。

右に見た見立ての句は時期的に見ると寛文から天和期に用例が集中しており、⑭⑮を除いて貞享期に入ってから用例が見当たらない点にも特徴が認められよう。そして⑭⑮二例を除いた十三例中六例が芭蕉の作であることから明らかに、芭蕉自身「野ざらし紀行」の旅以前はこのような見立ての句を好んでいたと推測されるのである。

三、「野ざらし紀行」の旅以後の「笑い」

ところが、芭蕉の『野ざらし紀行』の旅（貞享元年〜二年）を境に、それ以降の用例（A(2)a）は一転して笑う主体として「人間」を多く登場させるようになる。そしてその内容も芭蕉の句を中心に《挪揄》《嘲笑》から《自嘲》もしくは《笑いにならない笑い》へと変化しているように見受けられる。このことは「野ざらし紀行」の旅以降、芭蕉ならびに蕉門の関心が「趣向」から「内面観照」の方向に大きく転じた事を意味しているようか。ただし、次の例のみは例外的に「野ざらし紀行」の旅以前の用例。ほとんど唯一の例外と言つていいであろう。

⑯ わらふべし泣べし我朝顔の凋時

（天和年間作、真跡詠草。前書「朝顔寝言」）

一句の内容は昼前に起き出たところ既に朝顔の花が凋んでいて、花に向かう己れの姿が滑稽に見えて「笑うべきか泣くべきか」と自嘲気味につぶやくさまを詠んだもの。し

かし、とすれば《自嘲》の兆しは天和年間にすでに現れていたということになる（これに関しては堀切実氏も後掲論文「芭蕉の笑い、一茶の笑い」で同様の見解を示している）。ただし、それらが頻出するのはやはり貞享期に入ってからのものであり、用例を示せば次のようになるであろう。

⑰ 我恋は色紙をもてる笑より

宮司が妻にほれられて侘

（貞享二年作、「稿本野晒紀行」所収）

（芭蕉）

⑱ 岩ねふみ重き地藏を荷ひ捨

笑へや三井の若法師ども

其角

（貞享三年作「日の春を」百韻、享保二十年刊「鶴のあゆみ」所収）

コ斎

⑲ みちの早きは人のとりへか

声高な笑ひも腹を立よりは

東藤

（元禄元年作「色々のきくも」五句、寛政十一年刊

工山

「幽蘭集」所収）

⑳ 数々に恨の品の指つぎて

鏡に移す我がわらひがほ

義年

翁（芭蕉）

〔元禄二年作「文月や」二十句、「曾良俳諧書留」所収〕

⑳もの書て扇子へぎ分る別哉

翁（芭蕉）

笑ふて霧にきはひ出ばや

北枝

〔元禄二年作、元禄四年刊「卯辰集」所収。前書

「松岡にて翁に別侍し時、あふぎに書て給る」、左注

「となくく申侍る」

㉑日は入てやがて月さす松の間

（車）庸

笑ふ事より泣がなぐさみ

翁（芭蕉）

〔元禄七年作「秋もはや」歌仙、享和元年序「画兄

弟」所収〕

⑰は緊張のあまり色紙をもつて「苦笑い」したことを恋の誘いと勘違いされ、惚れられて困っているさまを詠んだもの。実際に詠まれているのは「色紙をもてる笑」のみであるが、付合全体に誤解から生じた色恋沙汰に対する「笑うに笑えない微苦笑」がうまく写し取られていると言えよう。

また、⑱は運搬の途中で重さに耐え切れず地蔵を捨て置いたところを見咎められ「笑わば笑え」と自嘲気味につぶ

やくさまを詠んだもの。「芭蕉連句抄」第三編（阿部正美氏、明治書院 昭49）はこれを石地蔵を叡山に運び上げる老法師の姿と見、句の背後に三井寺と延暦寺の対立を置いて解釈する。続く⑲は声高な笑い声を立てる下品な連れに閉口しながらも、足の早いことだけを取り柄として我慢して行こうとするさまを詠んだもの。こゝも笑う主体は旅の連れであるが、笑うに笑えない視点人物の「微苦笑」が浮かんできそうな作となっている。

さらに⑳は恋の恨み事が引き続いて起り、鏡に向かつて無理に笑顔を作ってみせるさまを詠んだものであるし、㉑も翁との別れの後、笑顔を装って霧の中へ踏み出そうと「なくく」（左注）決意するさまを詠んだもの。そして㉒も、人気がない寂しげな宵、無理に笑うよりも泣くことで気を紛らせようとする人物を詠んだものであり、いずれも哀感を帯びた《笑いにならない笑い》が写し取られていると言っているであろう。ただし⑳の芭蕉の句は「笑い」の語こそ含んではいるものの、むしろ「泣」ことを慰みとした内容であり、その点で他とは違った境地を詠んだ句と見ることが可能であろう。したがって、先の表ではA(2) bアに《自嘲を通り越したほろ苦い笑い》《笑いとは言えない

ような淡いユーモア」という項目を新たに設け、そちらに分類した。

とすれば、芭蕉個人が《自嘲的な笑い》《笑いにならない笑い》《苦笑い》を積極的に詠んだ時期は貞享二年以降元禄二年までに限られることになる。それ以降芭蕉は前掲⑭⑮、後掲㉑を除き作品中に「笑い」の語をあまり詠まなくなっていくのである。

堀切実氏は「芭蕉の笑い、一茶の笑い」(『国文学解釈と鑑賞』平10・5)において、芭蕉の「笑い」を次のように五期に分けて分類する。

- 1、寛文・延宝期：見立て・擬人化・パロディ・言語遊戯など機知的な笑い
- 2、天和期：談林的寓言・見立て・擬人化・パロディ・言語遊戯、自嘲の兆し
 - イ・言語遊戯、自嘲の兆し
 - イモアなど
- 3、貞享期：自嘲・微苦笑、風狂的な笑い、軽いユーモアなど
- 4、元禄初年期(元年九月～四年十月)：風狂的な笑い・ユーモアの徹底
- 5、元禄最晩年期(四年十一月以降)：平明なユー

モア

氏が「笑い」という言葉にとらわれず、広く芭蕉の「発句」から「笑いの要素」を含んだ句を取り上げているのに対し、拙稿では芭蕉の「発句」「俳文」等に加え芭蕉が一座した「連句」にまで枠を広げながらも「笑い」に類する語を含んだものに限って調査の対象とした。したがって結果には若干相違が生じたが、1～3のとらえ方は重なり合うし、4・5も分類の仕方こそ異なるものの、見方によっては重なり合う部分があるものと考えられる。

たとえば、氏の分類に従えば元禄初年～四年の前半までは「風狂的な笑い・ユーモア」を徹底させた時期であり、元禄四年後半以降は「平明なユーモア」を追求した時期ということになる。仮に氏の言う「風狂的な笑い・ユーモア」の中に《自嘲的な笑い》の逆説的な表れを見ることが可能であれば、氏の言うところは本稿の分類と重なり合うことになるし、氏の言う「平明なユーモア」の中に《自嘲の域を通り越したほろ苦い笑い》《もはや笑いとはいえないような淡いユーモア》に通じる要素を認めることが可能であれば、わずか一例ではあるが先の㉑の句もそれに該当

すると、言つていいように考えられる。いま堀切氏が「風狂的な笑い・ユーモア」の例として取りあげる句を紹介すれば次のようになるであらう。

(a) 米買に雪の袋や投頭巾

芭蕉

(元禄元年作、路通真蹟懷紙。前書「雪の夜の戯に

題を探て、米買の二字を得たり)』

(b) あやめ草足に結ん草鞋の緒

翁

(元禄二年作、元禄七年跋「おくのほそ道」所収)

(c) 稻雀茶の木畠や逃どころ

翁

(元禄四年作、同年跋「西の雲」所収)

(d) 我宿は蚊のちいさきを馳走かな

(芭蕉)

(元禄三年作、元禄十一年刊「泊船集」所収)

(e) 初しぐれ猿も小蓑をほしげ也

芭蕉

(元禄二年作、元禄四年刊「猿蓑」所収)

まず(d)に関しては氏自ら「自嘲的態度から生じる逆説的ユーモア」と記しているように、何のもてなしもできないことを逆に「風狂人」のもてなしとして示したものであるし、(a)も米を買いに行く途中「四角い米袋を投げ頭巾」

(堀切氏)にした奇妙な姿を自嘲的に描きながら、そこに常識にとらわれない「風狂人」の姿を示したものの。そして(b)も「あやめ草」を足に結ぶという奇妙な姿が世間とは相容れないことを自覚しながらも、あえてそれに興じることで、草鞋をくれた「風流のしれもの」への挨拶としたものと解されよう。

続く(c)は自分を避けるように、一斉に飛び立つ雀に一抹の淋しさを感じ取りながらも、よく「逃げ場所を心得ていることだ」(堀切氏)と軽いユーモアに包んで興じた一句であるし、最後の(e)も、折からの時雨を「因果な侘数奇の漂泊者にはお詠えむきの風趣だわい」と思っていると、かたわらの猿までが、小蓑をつけて、初時雨に興じたような様子をしている(尾形竹氏編「新編俳句の解釈と鑑賞事典」笠間書院 平12、堀信夫氏稿)ように見えるさまを詠んだものと解釈すれば、他の句と同種の趣を詠んだ句と位置付けることができよう。(c)の用例だけは「風狂」と呼ぶには根拠に乏しいところもあるが、それ以外の用例は程度の差こそあれ、世間的な常識・価値観からはみ出した自分の姿を「自嘲的」にとらえながら、なおかつそこに世俗にとらわれない「風狂人」としての生き方を示した句と解釈する

ことができる。

また、氏が「平明なユーモア」の例としてあげる用例も示せば次のようになるであろう。

(f) 冬瓜やたがひにかはる顔の形かほ (芭蕉)

(元禄七年作、元禄十二年刊『西華集』所収)

(g) 鞍壺に小坊主乗るや大根引 芭蕉

(元禄六年作、元禄七年序『すみだはら』所収。前

書「大根引といふ事を」)

(h) 振売の鴈あはれ也ゑびす講 芭蕉

(元禄六年作、同右。前書「神無月二十一日、ふか

川にて即興」)

(i) 家はみな杖にしら髪の墓参 芭蕉

(元禄七年作、元禄十一年奥『続猿蓑』所収。前書

略)

(j) 青くてもあるべき物を唐がらし 芭蕉

(元禄五年作、元禄六年刊『深川』所収。前書「深

川夜遊」)

(k) 年々や猿に着せたる猿の面 狂生芭蕉

(元禄六年作、真蹟懷紙。前書「元旦」)

やはり氏の言葉を借りて言えば、(f)は「見立てのおかしさを吹き飛ばしてしまふようなわびしさ」が込められた一句であるし、(h)も「めでたい恵比寿講の日に大声で鴈を売り歩く行商人の姿とは対照的に、首を垂れた鴈の姿がなんとも哀れであり、シニカルな笑いが生じてくる」一句。さらに、(i)も「先祖の墓参りをできる喜びと白髪頭ばかりのさびしさとが交錯して、ほろ苦い笑いが浮かぶ」一句と解されよう。また、(j)も「酒堂の精進を半ば諷論した」もの。そして最後の(k)も「ユーモラスな叙景の中にほろにがいわびしさ」をたたえた句ということになり、「飄逸味のある『がるみ』の句」と評される(g)を除き、いずれの句にもA(2)bに共通する要素を見て取ることは可能であろう。そして前掲②の芭蕉の句にもそれと同じような要素を見出すことは可能と考えられる⁽⁸⁾。

ただし先述したように「おくのほそ道」の旅(元禄二年)以降は芭蕉の作品から「笑い」の語が徐々に姿を消していくのであり(とすれば、芭蕉は「笑い」という言葉を取って用いずに堀切氏の言う「平明なユーモア」を追求したということになるであろうか)、蕉門における「笑い」の用例は、それ以降主に門人たちによって担われていくこ

とになる。そしてその門人たちの句には、それまでの蕉門には見られなかった新たな「笑い」、すなわち「屈託ない笑い」もしくは「談笑的な暖かい笑い」が多く詠み込まれているように見受けられる。以下にあげる用例はいずれもその典型と言つていいものばかりであろう。

四、「おくのほそ道」の旅以後の「笑い」

——門人達の「笑い」を中心に——

まずは次の例から紹介しよう。

②③ 鐘いくところにしかひがしか

（芭）蕉
其すがた別の後も一わらひ

（千）足

（貞享四年作「京までは」歌仙、正徳二年序「千鳥

掛」所収）

これは鐘が鳴るのは西か東かと慌しく旅立つ男の様子に一座が沸き立つさまを詠んだもの。一句の成立は貞享四年であり、やはり例外的に「おくのほそ道」の旅以前の作となるが、それ以後の作につながる要素を秘めた句と見て差し支えないであろう。ただし、このような「談笑的な暖か

い笑い」(「屈託ない笑い」)が頻出するのは、やはり芭蕉の「おくのほそ道」の旅を境にすること考えられる。以下順にその用例を示せば次のようになるであろう。

②④ 腕押すつよき霧の衣手

（槐）市
若殿の簾の中の大笑ひ

梅額

（元禄二年作「霧に今」歌仙、宝曆九年序「壬生山家集」所収）

②⑤ 秋の色宮ものぞかせ給ひけり

（路）通
こそぐられてはわらふ佛

全

（元禄三年作「いろくの」歌仙、同年刊「ひさし」所収）

②⑥ 何ともせぬに落る釣棚

（越）人
しのお夜のおかしうなりて笑出^ゝ

（荷）兮

（元禄三年作「いろくの」歌仙、同右所収）
②⑦ 去年の夏凡兆が宅に伏したるに、一畳の蚊屋に四国の人伏たり。「おもふ事よつにして夢もまた四種」と書捨たる事共など、云出してわらひぬ

（元禄四年成「嵯峨日記」、芭蕉筆）
②⑧ 栄よと未来を植し花の陰

（其）角

三人笑ふ春の日ぐらし

(嵐) 雪

(元禄五年作「両の手に」歌仙、「明和二年板 未来 記」所収)

②双六の石ちらし置壇のうへ

虚谷

笑ひを興に羽織はがる、

沾圃

(元禄六年作「其富士や」歌仙、「露沾俳諧集」所収)

③出来て来る青の下染氣に入て

(野) 明

なにをけらく、わらふかみゆひ

(諷) 竹

(元禄七年作「牛流す」歌仙、「元禄十一序」砂川」所収)

④は腕相撲に興じて「大笑ひ」する「若殿」の姿を描いた王朝絵巻風の一句であるし、⑤も「官女」たちがくすぐりあって笑う姿を「宮」が覗き見るさまを詠んだ句。いずれも王朝時代に趣を求めながらも、それ以前の作にはなかった《屈託ない笑い》が詠み込まれていると言つていいであらう。

また、⑥も「ある夜密かに夜這いをかけたところ、何もしないのに釣棚が落ち」(新日本古典文学大系「芭蕉七部

集」岩波書店 平2)、驚きのあまり一人笑いするさまを詠んだもの。一見、自分の所業を笑う《自嘲的な笑い》に分類されそうだが、ここも自分の滑稽な姿に声を立てて笑う、《屈託ない笑い》と解釈したいところである。

そして⑦はこの時期における芭蕉の貴重な用例。「四国」の人が泊まり合わせたため、見る夢も「四種」に違いないと戯れて笑い合うさまを綴つたもの。また、⑧も揚句らしく祝言性を込め、連衆の芭蕉・嵐雪・其角が高らかに笑い合うさまを詠んだものであり、⑨も壇上に双六石を散らした悪戯を笑つたばかりに座興として羽織を脱がされるさまを詠んだ句と解されよう。そして、最後の⑩もまた「下染め」の出来具合に満足し一人悦に入る「かみゆひ(髮結)」の《屈託ない笑い》を詠んだ句にほかならないのである。

これら門人の句に見られる《屈託ない笑い》《談笑的な暖かい笑い》は、一見、芭蕉の《自嘲を通り越したほろ苦い笑い》《笑いとはいえないような淡いユーモア》(A(2) bア)とはズレをきたしているように感じられるが、芭蕉の「笑い」だけを見ても、『おくのほそ道』の旅の前後で「肩肘張つた笑い」(A(2) a)の《自嘲》《笑いにならない笑い》《苦笑い》から「肩肘はらない笑い」(A(2) bア)の《自嘲

を通り越したほろ苦い笑い》《笑いとはいえないような淡いユーモア》へと変化しているのであり、その点では歩調を同じくすると見ていいように考えられる。これらの例を見ると両者ともに「軽み」期らしい「笑い」を個々に追求してはいるが、門人たちと芭蕉とでは詠み方や題材に少しづつ違いが生じつつあるさまをうかがい知ることもできるであろう。

今日「軽み」の風は「おくのほそ道」の旅中に芽生え、「ひざこ」「猿蓑」等の撰集での実践を経て最晩年に模索されたと見るのが一般的である。ここで見た芭蕉の《自嘲を通り越したほろ苦い笑い》《笑いとはいえないような淡いユーモア》、そして門人たちの《屈託ない笑い》《談笑的な暖かい笑い》の成立過程もおおよそこの流れに対応していると見ていいように考えられる。

ただし、「ひざこ」に関しては芭蕉の意志がどれだけ反映されているかが問題であり、第一歌仙が芭蕉の意にかなわず、連衆を変えて何度も巻き直されたことは周知の事実である。門人たちの句で例にあげた⑤⑥はともに第二歌仙に収められているが、この歌仙に芭蕉は一句しか参加しておらず、ここで「軽み」がどの程度実践されているかも慎

重に検討されねばならないところであろう。見方によっては、⑤は時代を王朝時代に設定したことが「重み」となっているとも考えられるし、⑥などは「夜這い」をかけるという設定、さらには理由もなく突然釣棚が落ちるという趣向がわざとらしく「重み」を感じさせるということも可能であろう。しかし、そこに詠まれた「笑い」の質そのものをとらえるならば、やはり明らかにそれ以前の作(A(2)a)とは違った要素が認められるのであり、芭蕉の《作わない軽い笑い》(A(2)bア)への志向と歩調を同じくするものと見ていいように考えられる。

五、「別座鋪」における「笑い」

以上のような変遷に立てば、元禄七年刊「別座鋪」に見られる「笑い」もまた、「軽み」期、門人たちの句に多く見られた《屈託ない笑い》《談笑的な暖かい笑い》と同質のものとして差し支えないように感じられる。「別座鋪」は元禄七年夏、芭蕉が最後の旅に向かう直前に江戸俳人達と一座した歌仙を始め、連句、夏の発句、芭蕉への饞別吟などを子冊が一書にまとめ、伊賀上野に滞在中の芭蕉に送

つたもの。芭蕉の作は少ないが、芭蕉個人から高い評価を与えられたことが元禄七年当時の書簡に明らかであり、「軽み」もしくは「軽み」期の「笑い」を考える際に欠くことのできない撰集として位置付けることができよう。

そして「別座鋪」における「笑い」の用例は、門人達の芭蕉への饒別吟、もしくは饒別辞に集中して見られる点に特徴がある。いま、その用例を浄求饒別吟の前文（子珊筆か）に求めれば次のようになるであろう。

深川の辺に浄求といへる道心あり。愚智文盲にして正直一扁の者也。常に翁につかへて、ちいさき草の戸を得たり。朝夕芭蕉菴の茶を煮^ル事妙なり。此度門人饒別の句を綴^ル。浄求つくく^ク聞居て、「愚も一句せん」と云。みなく腹を抱てとへば、指折文字を算て、「かく」といふ。おのく^ク笑あへる事、少時やまず。されども、愚成もの、心を量てしるし侍る。

はなむけに粽やさらば柏餅

浄求

句意そのものは「皆さんがはなむけに粽を送るならば、私は柏餅を送ることにいたしましたしょう」という他愛のないもの。「粽」「柏餅」はともに五月の季語として季寄せの類に取られているが（ただし「柏餅」の初出は天明三年刊「歯がため」と遅れる）、季節の茶菓で饒別の句を詠んだところに「朝夕芭蕉菴の茶を煮^ル」ことで「妙」とされた浄求の面目が示されているといえよう。

ここに見られる「笑い」も、いくぶん《揶揄》《嘲笑》を含んでいるあたり、A(1)もしくは主客の逆転はあるもののB(4)に近いものを感じさせはする。しかしここはA(1)と違って笑う主体は人間そのものであるし、《揶揄》《嘲笑》と言つても、その底には「愚成もの、心を量^ル」ろうとする暖かい心情が潜んでもいるのである。やはりここに展開される「笑い」もA(2)bイに分類した《屈託ない笑い》《談笑的な暖かい笑い》と同質のものとしていいのではないか。さらに、右の前文には蕉門の座の雰囲気が余すところなく写し取られており、その点でも貴重な資料と言つていいであろう。宝暦二年以降の再版本（鶴本平蔵本・橋屋治兵衛本）では、右の傍点部が削除・改変されることになるが、蕉門の座のいきいきした雰囲気が損なわれたまま後世に伝

えられたのは惜しむべき事柄といえよう。

「別座鋪」「餞別」の部にはこれ以外にも素龍餞別辞に「…侘敷を面白がるは、やさしき道に入たるかひなりけらし」と、あるじ（芭蕉）の打ほころびていへるぞ」と、

「談笑」の場における芭蕉の笑顔が写し取られているし、「餞別」の部の巻頭にも

五月雨や草鞋の緒迄笑繩

濁子

という発句が録されている。「笑繩」という言葉そのものは「結び目の緩くなった繩」を意味しているが、これも「笑繩」という言葉に「草鞋の緒」が実際に「笑う」さまを掛け合わせ、「旅の連続で結び目は緩くなっています、五月雨の中、草鞋の緒も翁の旅立ちを笑って寿いでいます」と祝言性を込めたものと考えられる。作意自体はA(1)（特に前掲①③⑧などの句）に見られた「見立て」そのものと言ってもいいが、ここもその根底には芭蕉の多幸を願う連衆の暖かい思いやりが秘められていると見て取ることができよう。やはりここに展開される「笑い」も、人間を主体としていない点で変則型にはなるが、先にあげた（擲

揄）《嘲笑》（A(1)）、《自嘲》（A(2)a）などとは異なった《屈託ない笑い》《談笑的な暖かい笑い》の一種と見ていいのではないか。

麻の生平まびらのひとへに衣打かけ、身がるく成行程、翁ちかく旅行思ひ立給へば、別屋に伴ひ、春は帰菴の事を打なげき、扱さて誹談を尋けるに、翁、「今思ふ鉢は、浅き砂川を見るごとく、句の形・付心ともに軽きなり。其所に至りて意味あり」と侍る。いづれも感入て、及すも此流れをしたふ折節、庭の夏草に発句を乞て、咄ながら歌仙終ぬ。

「別座鋪」は右の序文（子珊筆か）によつて巻頭を飾っている。ここに見られる「浅き砂川を見るごとく」という一節は「軽み」を論じる際に必ずといっていいくらいに引用される有名なものであるが、あえてこの言葉を用いて表すならば右の餞別吟もしくは餞別辞に見られる《底意のない笑い》もしくは《談笑的な明るい笑い》の中にも、芭蕉が「軽み」期に追い求めた「浅き砂川を見るごとき」風情の、門人たちによる一つの実践例を見ることができるよう

に感じられるのである。

注

(1) 引用は『校本芭蕉全集』第七卷(富士見書房 平元)による。ただし、『』を私に補った。以下個々に巻数は示さないが、特に断つたもの以外蕉門系作品・資料の引用は同集に従い、原則として字体を通行のものに改めて引用することとする。

(2) これ以外にも、芭蕉が門人との問答の中で「笑」つたり、「大笑い」したりするさまが『去来抄』(去来著 宝永元年頃成立)に三例、『梟日記』(支考編 元禄十二年刊)、『十論為弁抄』(支考編 享保十年刊)、『俳諧問答』(去来・許六稿 元禄十一年奥書)、『旅寝論』(去来著 元禄十二年成)に一例ずつ見受けられる。さらに『飯笥物語』(東藤編 元禄八年跋)には賛を望まれて芭蕉が「笑む」さまが記されているし、『芭蕉翁追善之日記』(支考編 元禄七年成)には、死の間際、障子に集まった蠅を門人たちが取るさまを眺めながら「此蠅のおもはぬ病人をやどしてよろこぶらめ」と「笑む」さまも写し取られている。

(3) ここでの「笑い」を「嘲笑」と見る向きもあるが、今日のこの「笑い」はおおよそ次のように解釈するのが一般的であろう。

「小海老」の句を叙景句と取って自分の自負する「病鷹」(引用者注・芭蕉は両句とも心境象徴句のつもりで詠み、「病鷹」の句の方を高く評価していた)と同列に論じた去

来・凡兆二人の見当違いを揶揄するとともに、なるほどそういうふうな「小海老」の句を純叙景句として評価するとなれば、自分では問題にもならぬほどすぐれていると思っていた「病鷹」の句と同列に並べて、それぞれの好悪による議論の対象にもなるんだな、という作者としての苦笑を漏らしたものと見られはしないか。

(尾形仿氏稿、『鑑賞日本古典文学 俳句・俳論』角川書店 昭52)

(4) 本稿では調査の範囲を『校本芭蕉全集』に収められる作品(書簡を除いた、芭蕉の発句・俳文・紀行文と芭蕉が一座した連句作品)に限定した。用例の検索には『校本芭蕉全集』総合索引を利用したが、「笑ふ」「笑む」等の言葉では検索できない。「一笑ひ」「朝咲み」「吹き出し笑ひ」等の用例も気付いた限り拾い上げ調査の対象とした。その際、作品の成立年は特に断つたもの以外は『校本芭蕉全集』に従い、(一)内にその時期を記し主となる時期には傍線を施した。また、拙稿では用例に信章・才丸など厳密には蕉門とは言えない俳人の句も含んでいるが、いずれも蕉門に近い位置で活動した俳人たちであり、互いに影響し合うところがあったものと推測し調査の対象とした。なお、蕉門全体の「笑い」を厳密にとらえるためには、芭蕉が一座していない作品にまで調査の域を広げる必要があるが、それは別稿での課題とし、今回は芭蕉個人の作品もしくは芭蕉が一座した連句作品等に関しておおよそそのアウトラインを示すにとどめることとした。

(5) ただし同時代の他門の俳諧を見ても、

狂言物として

よいせりふ囀りの鳥笑の山

蝶々子

聖霊は笑はずくはず物いはず

松風

(以上二例、延宝六年序「江戸広小路」)

木兎や一枝の花鳥笑声

同(左) 益翁

(延宝八年跋「阿蘭陀丸」番船)

色深一度多みて老茄子

松翁子

(延宝八年序「軒端の独活」)

など、人間以外のものを「笑う」主体に据えた例は多く、この傾向はひとり蕉門に限らず、談林一般に見られる傾向であったことがわかる。なお、右の用例の引用はすべて古典俳文学大系4『談林俳諧集(二)』(集英社 昭50再版)による。

(6) 寛文十二年序「貝おほひ」二十七番判詞には「わらはれぬ作意なれ共、松のは、んといふ事共小歌のふしは……」

(芭蕉筆)と、人間の側から「作意」を「わらはれぬ」とした例が見られるが、ここでの「わらはれぬ」は「笑えない」「洒落にならない」の意を表す慣用的な表現として用いられているため調査の対象からははずすこととした。また、元禄元年作「色々のきくも」歌仙(寛政十一年刊「幽蘭集」所収)には

雪の日の砧になみだおとしける

(閑) 水

柴たく壁のゑみてほろほろ

(東) 藤

という例も見受けられる。ここの「ゑみて」は「割れてく

ずれる」さまを表す言葉だが、前句のつながりから見ると、「壁」がほろほろこぼれるさまを泣き笑いするさまに見立てた句と解することができる。しかし、この付合自体、従来から偽作の疑いもたれているものであり、やはり調査の対象からははずして考えることにした。

(7) この句は「校本芭蕉全集」第一巻(富士見書房 昭63)に貞享四年の作とするが、新潮日本古典集成「芭蕉句集」(新潮社 昭57)、「新編芭蕉大成」(三省堂 平11)、「新編日本古典文学全集」松尾芭蕉集①全発句(小学館 平7)等には天和年間の作と推定されており、ここは後者に従うこととする。さらに句意の方も、新潮日本古典集成「芭蕉句集」は自分の顔を朝顔に見立てた句と解するが(この説に従えばA(1)に分類しなければならないことになる)、やはり新編日本古典文学全集「松尾芭蕉集①全発句」、「校本芭蕉全集」第一巻、山本健吉氏「芭蕉全発句」(山本健吉全集)第六巻 講談社 昭58)など今日多く取られる解釈に従うこととする。

(8) ただし、B(4)「笑われる客体が人間」に分類されるもののみは時期の別を問わずそのほとんどが「挪揄」(嘲笑)で占められており、A(2)「笑う主体が人間」の場合とは趣を異にしているように感じられる。たとえば、

いはくらの錚なつかしのころ

重五

おもふこと布搦歌にわらはれ

野水

(貞享元年作「炭売の」歌仙、貞享元年奥「冬の日」所収)

は心の内を「布搗歌」の歌詞に歌われ、擲揄されているように感じる女の様子を詠んだものであるし、

いつ作つても詩は上手也

(支考)

女房に只わらわれぬ覚悟して

(丹野)

(元禄七年作「ひらく」と) 歌仙、元禄九年刊『桃舐集』

所収)

は妻に「嘲笑」されないように気を張る男の姿を詠んだもの。さらに、

うき恋に文つき返し笑れて

尻もつたつる恨寝の夜着

(芭蕉)

(年代不詳付合、元禄十五年刊『宇陀法師』等所収) も恋文を「嘲笑」とともに突き返されて「恨み寝」をする男の様子を詠んだ句にほかならない。「笑われる」という言葉の構造上、「嘲笑される」に近い意で用いられることが多かったのであろうか。

(9) 『別座鋪』以外の撰集では『続猿蓑』に一例、

更る夜や稲こく家の笑声

方平

という用例が見られるが、ここに詠まれる「笑い」も新日本古典文学大系『芭蕉七部集』(岩波書店 平2)が「夜になつてもなお稲の脱穀。収穫の喜びが人々を励まして時折哄笑もわきあがる」(上野洋三氏稿)と注するように、やはり『おくのほそ道』の旅以降、門人達の句に多く見られた(屈託ない笑い)《談笑的な笑い》(A(2)bイ)と同質の「笑い」と見做して差し支えないであろう。ただし「すみだはら」「深川」といった「軽み」期を代表する他の撰

集には前掲⑤を除き「笑い」の用例を見いだすことはできない。

(10) 引用は古典俳文学大系『蕉門俳諧集(二)』(集英社 昭46)による。以下『別座鋪』の引用は同書に従うこととする。

(11) 米谷巖氏も「浄求の愚直な真心を、ユーモラスに紹介した前文があり、芭蕉を慕う連衆に通いあうあたたかい心がおのずから伝ってくる」(『俳諧別座鋪』論『国文学』昭52・4)と解釈する。

(ほんま・まさゆき 成城学園高等学校教諭)